

## 【研究論文】

# 新制国立大学胎動期の学長選考

## 岐阜大学初代学長青木文一郎の事例

廣内 大輔

岐阜大学教育推進・学生支援機構

岐阜大学地域協学センター

### 要旨

岐阜大学初代学長青木文一郎の選考にあたっては、岐阜県出身であるか否かも考慮しつつ45名の候補者リストが作成された後、安藤正次、青木文一郎、牧野英一の3名に絞り込まれた。筆頭候補者の安藤が固辞したことにより青木の就任が内定した。一連の手続きは岐阜大学教官予定者によって民主的に進められており文部省等の介入は確認できず、胎動期の岐阜大学において既に自治的な選考が機能していたことが明らかとなった。

キーワード：青木文一郎，岐阜大学，学長選考，新制国立大学，台北帝国大学

### 1. 課題設定

昭和24年5月31日、国立学校設置法の施行により69校の国立大学が誕生した。この時の初代学長は如何様に選出されたのだろうか。学長選考に際して、各大学（前身校）に許された裁量権と文部省等の意思とは、どのようなバランス関係にあったのだろうか。

国立大学の学長選考について、戦前から法人化後までを網羅的に描いた研究の一つに、羽田・金井（2010）がある。羽田らは、学長選考のメカニズムと選出された学長像の双方に関心を払い、新制国立大学初代学長の氏名および略歴を一覧表にまとめている。その表からは、自主的な選考が試みられたと見做すことのできる大学は10校に満たないことや<sup>1</sup>、選考の過程で文部省の意向が影響したケースもあったことが分かる。

ここで史実を振り返れば、昭和24年1月12日には教育公務員特例法が公布・施行されており、大学の学長選考は「大学管理機関」によって行われることが既に定まっていた。しかし本研究が対象とする時期、つまり昭和24年2月から4月の段階では、まだ当の新制国立大学自体が存在しておらず、さらにはこれらの大学が学長選考の自主審査権を得るのは、完成年度を超えた昭和28年以後のこととされている<sup>2</sup>。このことを踏まえると、初代学長

の選考がどのような手順で進められたのか、その実態について一層興味が湧く。

この点に関連して上述の先行研究は、昭和 24 年 2 月 25 日に文部省から「学長および学部長決定の腹案について」という談話が発表されていたことを指摘している<sup>3</sup>。同談話は初代学長の選出について、まずは各地の前身校の側が相応しい人物を選び、次いでそれを文部省に報告するよう要請する内容であったという。これらのことから、初代学長の決定については、必ずしも国側が一方的に割り当てたのではなく、各大学（前身校）の自主性、自立性が或る程度、保障されていたと考えられる。

だが羽田らの研究は、個別機関の学長選出に関して、「大学設置委員会の審議を経て、文部大臣が任命」<sup>4</sup>したと言及する程度に留めており、其々の大学が開学するまでの間、すなわち胎動期において、どのようなプロセスを経て初代学長を擁立したのかを把握するに十分ではない。そこで今回、一機関の事例として岐阜大学を取り上げ、その初代学長選考について明らかにする。

## 2. 研究対象としての岐阜大学

ここで、本研究が対象とする岐阜大学について、その特徴と選定の理由を述べておきたい。

戦後の岐阜県における高等教育改革は、複数の既存旧制専門学校をどう統合するかを巡って意見がまとまらず混乱を極めた。新たに生まれようとする「岐阜大学」は、開学 4 ヶ月前の時点で、岐阜農林専門学校（農専）を前身とする農学部と、岐阜師範学校（師範）および岐阜青年師範学校（青年師範）の 2 校を前身とする学芸学部との 2 学部体制でスタートすることさえ決定していなかった。その背景には、当時、名古屋大学から農専に対して新制名古屋大学農学部の母体として参画するよう働きかけがなされており、このため農専が、岐阜県内の専門学校との合併に積極的ではなかったことがある。

新制国立大学の設置申請に係る書類は昭和 24 年 2 月 20 日までに作成することとされていた<sup>5</sup>が、最終的に農専が名古屋大学への編入を断念し、岐阜大学農学部として歩むことを決心したのは、申請締切のおよそ 1 週間前の 2 月 12 日のことであった。

この経緯を理解すると、胎動期の「岐阜大学」は、初代学長候補者の選考について十分に時間を割くことが叶わなかったと想像できる。そしてそのことは、新制国立大学制度の史的研究において特徴的な事例として位置付けられる可能性があるように思われる。

ところで、いずれの大学であれ、歴代学長について知るためには、その沿革史にあたることが王道かつ不可欠であるが、岐阜大学の場合、創立時から在った農学部および学芸学部（後の教育学部）の沿革史を紐解いても、初代学長が選出された経緯については触れられておらず、開学から 70 年近くを経た今もまとめられていない。しかし、このたび同大学から、開学前後の議事録など当時の状況を記した史料が発掘された。これを機に、それら一次史料を読み説くことで、初代学長青木文一郎が就任する過程を解明する。

### 3. 学長選出方法の確立

農専，師範，青年師範の3校で新制国立大学岐阜大学を発足させることが決まってからは，直ちに初代学長の選出に向けた動きがあった。その状況は，農専側史料として『教官会議記録』（岐阜大学応用生物科学部所蔵），および師範側の史料である『協議会議事録』（岐阜大学教育学部所蔵）<sup>6</sup>に記録されている。

これらの史料によると，農学部と学芸学部の2学部で岐阜大学を発足させることに決めた後，2月14日～17日までの内に，農専校長の蜷川睦之助は上京し，文部省にこの事実を報告したようである。また，岐阜大学の初代学長を農専関係者から出したいとの意向は，既にこの頃には固まっていたようであり，2月17日に開かれた農専教官会議の記録には，師範側に伝えたい要望としてこの旨が記されている。

2月28日には，農専，師範，青年師範3校の校長および農専教官5名，師範・青年師範教官5名の合計13名で構成する「岐阜大学創設準備委員会」<sup>7</sup>を置くことで合意している。この岐阜大学創設準備委員会は，学長や大学の本部所在地について審議する機関であり，多数決よりも懇談協議を重視することとしていた。また，2月17日頃，農専の中には，教官奥田彥を委員長とする「大学準備委員会」<sup>8</sup>が設けられた。

岐阜大学創設準備委員会は3月4日に発会した後，3月7日，11日，16日，19日に開かれたとされるが，初代学長の選出方針について骨子が定まったのは3月11日のことであった。同日の日付が残る文書「学長の詮衡について」を全文引用する。

#### 学長の詮衡について

##### (一) 方針

1. 校の内外を問はず適任者を選ぶこと
2. 学長は學内より選出された場合には出身學部に復歸し得ないこと

##### (二) 學長候補者資格

1. 大學教育に深い理解のある人（出来得れば大學生活をした人）
2. 行政的手腕のある人
3. 人格識見の秀れた人
4. 両學部に深い関心を有する人

##### 申合せ事項

関係學校は一致協力して適任者を求むるよう努力すること

以上

昭和二十四年三月十一日 於女子會館

また，上に引用した史料とは別に「學長候補選出方法について」という文書も存在する。こちらは選出手順の詳細を示したものである。農専側史料『教官会議記録』に収録されてい

るこの文書に日付はない。だが、字句の異同は若干あるものの題目を含めてほぼ同じ文書が、師範側史料である『協議会議事録』の中にも残されており、その末尾にはペンで、「以上は三月十一日農専奥田氏私案である」と書かれていることから、以下に引用するその手順も3月11日頃には固まっていたと推測できる。農専側史料の同文書の全文は次のとおりである。

学長候補選出方法について

- 一．学長候補推薦権者（以下推薦権者と稱す）は教官会議の構成員とする
- 一．推薦権者は候補者三名以内を連記し之を無地の封筒に入れ更に之を他の封筒に入れ其の表に所属学校長名を其の裏に自己の姓名を記し所属学校長に提出すること
- 一．推薦者は被推薦者の年令現住所経歴及郷土との関係等選定に参考になると思はれる事項を略記すること
- 一．各学校長は之を協議会<sup>9</sup>に提出すること
- 一．協議会は之を開封し被推薦候補者を ABC の順に排列し候補者名簿を作成すること
- 一．各学校長は之を各学校の推薦権者に呈示し候補者の適否の意見を求めること
- 一．各学校長は其の意見を協議会に発表すること
- 一．協議会は其の意見を斟酌し委員の多数の意見に基き適任者を選ぶ（時により投票に依る）こと

以上

これらの文書に則って初代学長の選考は進められたとみられる。「学長候補選出方法について」には、学長候補者を選ぶ基準の一つとして、「郷土との関係」が明記されている点が興味深い。岐阜県に所縁のある人物を求めようとしていた証拠と言えよう。事実、学長選出にあたって、地元との繋がりは重視されていたようであり、当時の岐阜県知事藤嘉門は、岐阜大学初代学長人事について文部省から意見を求められたことを証言<sup>10</sup>している。また時の文部大臣高瀬荘太郎は、全ての新制国立大学初代学長の発令を終えた際、学長選出にあたっては、学校関係者と「地元の意向を尊重し」たとの談話を発表している<sup>11</sup>。

#### 4. 45名の第一次候補者

昭和24年3月14日に開かれた農専の教官会議では、蜷川校長と奥田彥から、学長選出の進め方について説明がなされるとともに、3月16日の朝までに其々が適任と考える者の氏名を校長に提出することを決定した。そして16日に農専にて開催された岐阜大学創設準備委員会の席上、各校から持ち寄られた票が開封され、総勢45名に上る第一次候補者がア

ルファベット順<sup>12</sup>にリストアップされたのである。それら 45 名とは次の者たちであった。

表 1 第一次候補者 45 名

1	青木文一郎	10	日高第四郎	19	香川冬夫	28	三宅康次	37	鈴木栄太郎
2	安藤正次	11	伊藤恭一	20	菊池秋雄	29	蜷川睦之助	38	千賀博
3	安倍能成	12	伊藤誠哉	21	各務虎雄	30	中野効四郎	39	高木貞治
4	青山新一	13	窪田忠彦	22	松久義平	31	二瓶貞一	40	田所哲太郎
5	榎本中衛	14	桑木彥雄	23	牧野英一	32	長屋順耳	41	竹山説三
6	福島重一	15	木方庸助	24	松野喜内	33	奥田彥	42	高橋悌蔵
7	藤岡光長	16	可知貫一	25	松本丞治	34	島善鄰	43	高松正信
8	伏屋義一郎	17	葛西勝弥	26	武藤嘉一	35	下條康磨	44	宇田一
9	東畑精一	18	額瀨理一郎	27	武藤嘉門	36	澁谷紀三郎	45	湯浅八郎

農専では 3 月 18 日に再び教官会議を開き、リストアップされた第一次候補者 45 名について一人ずつ検討した。この時に検討の指針としたと思われる文書が、師範側史料から見つかった「申合せ事項」である。3 月 16 日の日付を残すこの文書は、学長候補者を絞り込む際に「公職及び教職追放該当者」を外すよう求めるなどの注意点を記したものであるが、この文書の後半には選出に際しての具体的な手続きが記されている。

当該部分には、「選衡は協議会の協議によることを原則とするも協議会委員全員の意見が一致しない候補者については各人について投票により決定することがある」、「投票による最後の選衡は十三票中十票の賛成者のあることを条件とする」、「次回協議会は三月十九日（岐阜駅午前八時十八分発垂井下車）とする」とある。ここからも、多数決よりも協議を重視していたことが分かる。「十三票」とは岐阜大学創設準備委員会の構成員数 13 名を意味している<sup>13</sup>。加えて、利用すべき鉄道の情報が記載されていたことで、3 月 19 日の岐阜大学創設準備委員会が青年師範<sup>14</sup>にて開かれたことが分かる<sup>15</sup>。

## 5. 農専が推した 15 名

農専側では、リストにあった第一次候補者 45 名の中から昭和 24 年 3 月 18 日のうちに 15 名を選び出し、それらを翌 19 日の岐阜大学創設準備委員会で披露することになった。3 月 18 日の「教官会議記録」には、選び出された 15 名<sup>16</sup>について氏名のみがペンで記されている。表 2 では「教官会議記録」の記載順に、其々の氏名、生年、出身地、学歴、学位、職歴等のプロフィールを紹介する<sup>17</sup>。

表 2 に示すとおり 15 名全員が旧制大学の教授経験者であった。部局長等の管理職経験者も目立つ。専門分野については、安藤と木方の 2 名が文系である他は皆、理系である。北海道帝国大学関係者<sup>18</sup>は、伊藤、葛西、三宅、澁谷、田所、高松の 6 名。台北帝国大学に縁の

## 新制国立大学胎動期の学長選考

ある者は、青木、安藤、澁谷の3名。岐阜県出身者は5名含まれていた。青木（岐阜市），青山（養老町），木方（岐阜市），可知（中津川市），竹山（各務原市）<sup>19</sup>の各人である。

表2 農専が選び出した15名のプロフィール

	氏名	生年	出身地	略歴
1	青木文一郎	明治16年	岐阜県	東京帝国大学理科大学動物学科卒業。台北帝国大学教授，理農学部長，理学部長を務める。最終的にこの青木が岐阜大学初代学長の座に就く。詳しい経歴については本年報に掲載の別稿「岐阜大学初代学長青木文一郎の経歴」を参照されたい。
2	安藤正次	明治11年	埼玉県	神宮皇学館卒業，東京帝国大学文科大学選科言語学科卒業。神宮皇学館教授，台北帝国大学教授，総長，戦後は国語審議会会長，東洋大学教授を務めた。
3	青山新一	明治15年	岐阜県	岐阜県立師範学校卒業，東京高等師範学校卒業，理学博士。東北帝国大学教授，理化学研究所所員。株式会社金門製作所顧問。
4	藤岡光長	明治18年	愛媛県	東京帝国大学農科大学林学科卒業，林学博士。九州帝国大学教授，東京帝国大学教授を務めた後，林業科学技術振興所長となる。
5	伊藤誠哉	明治16年	新潟県	東北帝国大学農科大学農学科卒業，農学博士。北海道技師，北海道帝国大学教授，植物園長，農学部長，総長を務める。日本学士院会員。
6	桑木彥雄	明治11年	東京府	東京帝国大学理科大学物理学科卒業，理学博士。東京帝国大学助教授，明治専門学校教授，九州帝国大学教授，松本高等学校校長を歴任。日本科学史学会初代会長。
7	木方庸助	明治22年	岐阜県	京都帝国大学文科大学英文科卒業，文学博士。松山高等学校教授，広島文理科大学教授を歴任。戦後は神戸市外国語大学学長，京都外国語大学学長を務めた。
8	可知貫一	明治18年	岐阜県	東京帝国大学農科大学農学科卒業，農学博士。岐阜県技師，農商務省技師，東京帝国大学講師，京都帝国大学教授を歴任。八郎潟や巨椋池の干拓工事で著名。
9	葛西勝弥	明治18年	岩手県	東京帝国大学農科大学獣医学科卒業，農学博士。東北帝国大学農科大学実科講師，北海道帝国大学教授，南満洲鉄道株式会社奉天獣疫研究所所長を経て北里研究所理事。日本獣医師会理事および日本獣医学会理事を務めた。
10	三宅康次	明治15年	東京府	札幌農学校卒業，農学博士。秋田農業学校教諭，東北帝国大学農科大学講師，北海道農事試験場長，樺太庁中央試験所所長を経て北海道帝国大学教授，農学部長。帝国製麻株式会社札幌研究所顧問。
11	澁谷紀三郎	明治16年	北海道	東北帝国大学農科大学卒業，農学博士。東北帝国大学農科大学副手，台湾総督府中央研究所技師，台湾総督府農業試験所技師，台北帝国大学教授。
12	田所哲太郎	明治18年	秋田県	東北帝国大学農科大学卒業。農学博士にして理学博士。東北帝国大学農科大学助手，北海道帝国大学農学部教授，同大学理学部教授，理学部長。戦後は北海道学芸大学，帯広畜産大学，北海道女子短期大学の各学長となる。
13	竹山説三	明治31年	岐阜県	京都帝国大学理学部物理学科卒業，理学博士。京都帝国大学理学部助手，講師，三重高等農林学校講師，広島文理科大学助教授，大阪工業大学教授を経て大阪帝国大学工学部教授。
14	高松正信	明治17年	東京府	札幌農学校卒業，農学博士。東北帝国大学農科大学助手，助教授，教授を経て北海道帝国大学教授。
15	宇田一	明治26年	福島県	東京帝国大学農科大学卒業，農学博士。農商務省養蚕試験所技手，三重高等農林学校教授，安城農林学校校長，建国大学教授，奉天農業大学学長，CIE農業顧問を歴任。後に明治大学農学部長となる。

当初の45名のリストには、農専校長の蜷川睦之助や後に岐阜大学農学部第3代および第5代学部長となる高橋悌蔵といった自校教官の名前もあったがこの段階を通過することは

なく、15名は全て外部の者<sup>20</sup>であった。

## 6. 3名の最終候補者

前章で選び出された15名はあくまで農専側の意向に過ぎないことに注意を要する。すなわち昭和24年3月19日の岐阜大学創設準備委員会の席に、師範・青年師範の側も農専と同様に自分たちの意向を表明したものと考えられるが、その際、具体的に第一次候補者45名の内の誰を推してきたのかを示す史料は見つかっていない。そして当日、両陣営がどのような意見交換を行ったのかも明らかでない。しかし以下に抜粋するとおり、農専で3月29日に開かれた教官会議では、3月23日には青木から学長就任の内諾を得たことが報告されている。よって3月19日の岐阜大学創設準備委員会において、あるいはそれ以後3月22日までの間に、最終候補者として安藤、青木、牧野の3名を選んでいたことが伺える<sup>21</sup>。3月29日の農専「教官会議記録」に並ぶ、蜷川校長と奥田彥の発言は次のとおりである。

### 八. 岐大学長候補について

校長 一 協議会に於て詮衡の結果第一候補安藤、第二候補青木、第三候補牧野<sup>22</sup>の三氏を決定し更に二名追加したいと試みたが決定するに至らず直ちに内交渉を進め二十二日岐師校長と共に安藤氏を訪ねたが□□<sup>23</sup>事情により承諾を得るに至らなかった

奥田 一 二十三日福島女子部長と共に青木氏を訪ね学長就任の内諾を得た。その際在任期間は二、三年本部の人事については行政整理等の関係もあるから学校側に任せてほしい旨諒解を求めた

ここで3番目に名前があがった牧野とは、先の45名のリストにある牧野英一を指している<sup>24</sup>。農専側で取りまとめた15名には含まれていなかったことから、師範・青年師範側の意向によるものであろうか。ちなみに牧野英一は明治11年生まれ。岐阜県高山市出身の刑法学者にして法学博士である。東京帝国大学法科大学卒業後、裁判所判事・検事、東京帝国大学助教授・教授を歴任。昭和11年に帝国学士院会員となる。昭和21年に貴族院議員となり、同25年に文化勲章を受章。翌26年には文化功労者に選ばれた碩学である<sup>25</sup>。

さて、安藤、青木、牧野の3名を最終候補者としてからは、即座に本人との交渉に入ったようである。まずは3月22日に蜷川校長と師範校長の松久義平が安藤を訪ねたものの了解を得ることができず、翌23日には奥田彥が、当時師範の教授にして同校女子部長を務めていた福島重一<sup>26</sup>と共に青木に面会<sup>27</sup>し、ここで青木から承諾を得ることに成功した。特筆すべきは、青木も奥田もそして福島も皆、戦前戦中の台北帝国大学で共に教鞭を執った者同

士であったことである。

4月20日の農専「教官会議記録」によれば、4月15日には、蜷川農専校長と松久師範校長が青木を訪ねて正式な承諾を取り付けたとし、一方で『岐阜農専新聞』（昭和24年5月15日付）は訪問日こそ記していないものの、3月29日以降、青年師範校長海野隆之進をも含めた3名で青木を訪ねたとする。いずれにせよ、学長候補者内定のニュースは早くに流れたようであり、『朝日新聞』（昭和24年4月5日付）の記事には、武藤嘉門岐阜県知事により青木氏に内定していることが語られている。この後、文部省から青木への発令は5月31日付で行われた<sup>28</sup>。

昭和24年6月10日金曜日、岐阜大学農学部となった稲葉郡那加町のキャンパス<sup>29</sup>に、青木文一郎が初出勤した<sup>30</sup>。この時、青木は満65歳。この日から、在任のまま死去する昭和29年7月まで、新生岐阜大学の礎を築くべく初代学長を務めたのであった。

## 7. 結論

新制国立大学の一つである岐阜大学における初代学長の選考は、前身校其々の意見を踏まえて民主的に進められていた。選出を担ったのは前身校の教官たち、つまりは岐阜大学の教官予定者であった。多数決よりも協議を重視していた。学長候補者は岐阜県出身であるか否かという点からも検討されていた。前身各校からの内部昇格が主張された形跡はなく、むしろ旧制大学の教授経験者という威信を頼みにしたと考えられる。

青木は選考の最終段階において筆頭候補者ではなく、当初は安藤正次を迎えようと計画されていたことが明らかとなった。確かに安藤であれば、その専攻分野が国語学であるため師範・青年師範側の側からも支持を得易く、対外的にも文理双方の学部を持つ総合大学のトップに相応しい人選と言えたかもしれない。加えて、旧制帝国大学の総長を務めた経歴も、新たに誕生する大学に箔を付けるうえで強く働くところであった。

文部省は選考に際し、地元岐阜県との関係も検討するよう求めた程度であり、それは介入というレベルには達していなかった。つまり選考は、日程的にはタイトであったが、終始前身校教官によって主体的に進められたと言える。当時にして既に自主審査が機能していたと判断できる。

今後の研究課題を、岐阜大学という個別機関に関するものと、新制国立大学全体に関するものとに分けて述べれば、前者については、師範・青年師範の側が第一次候補者45名をどのように絞り込み、3月19日の岐阜大学創設準備委員会にて披露したのかを示す史料を発掘することがあげられる。それら師範側の状況を示す史料が発掘された暁には、本稿が描いたストーリーに修正が加えられることもあるだろう。後者については、時を同じく船出しようとしていた国立大学全体で、幾人の人物が初代学長候補者として検討されていたのかという問いが立つ。全国で数千名もいたとは考え難い。おそらくは限られた人物に対して、複数の大学からラブコールがかかったというのが実態ではないだろうか。



本稿に掲載した 45 名の第一次候補者リストに相当するものを、他の 68 大学全てについて作成し終えた時、新制国立大学初代学長選考の全容が明らかになる。そしてそれは、当時の我が国に、大学の長としてその舵取りを担うことのできる人材が十分に育っていなかったことや、当時の大学教官たちが大学の長にどのような役割を期待していたかということ物語ることになるであろう。

【注】

- 1) 羽田・金井(2010) 161-162 頁の表 1 によれば、岩手、東京教育、お茶の水女子、三重、鳥取、島根、岡山、熊本の各国立大学。これらには自主的に選ぶと試みたが実現しなかった事例や、選んだ人物が実際には学長に就けなかったケースを含んでいる。
- 2) 羽田・金井前掲論文 160 頁。
- 3) 羽田・金井前掲論文 160 頁, 173-174 頁, および『岡山大学二十年史』57-58 頁。
- 4) 羽田・金井前掲論文 160 頁。
- 5) 『創立 50 周年記念誌』19 頁, および『岐阜県の師範学校: その歩みと岐阜大学教育学部』341 頁。
- 6) これら 2 つの簿冊はこのたび、岐阜大学応用生物科学部職員神山千晴氏の手によって其々の学部から発掘された。
- 7) 別の史料には「岐阜大学創設準備協議会」という名称が見られる。また『創立 50 周年記念誌』(19 頁)には「大学創設準備協議会」という表現も登場するが、いずれも同じ審議機関を指していると思われる。
- 8) 『創立 50 周年記念誌』(19 頁)の表現。昭和 24 年 2 月 17 日付の農専教官会議記録で「岐阜大学準備委員会」と書かれている会議体も同一のものと判断する。
- 9) 注 7 に示したように、協議会と岐阜大学創設準備委員会とは同じ審議機関と解釈する。
- 10) 『朝日新聞』(昭和 24 年 4 月 5 日付, 岐阜県図書館所蔵)。
- 11) 『朝日新聞』(昭和 24 年 6 月 3 日付, 岐阜県図書館所蔵)。
- 12) 表 1 の 9 番目の東畑精一の名字は「とうはた(とうばた)」と読むが、この位置に記載されていることから「ひがしばた」のように誤読されていた可能性がある。
- 13) 農専側史料の「学長候補選出方法について」の最後には鉛筆で「8/13」とメモ書きがある。師範側史料の同題目文書にも赤鉛筆で「/13」と記されている。これらの分母はいずれも構成員数 13 名を意味していると考えてよいだろう。
- 14) 岐阜県不破郡垂井町にあった。同地には現在、岐阜県立不破高等学校がある。
- 15) 青年師範での開催が予定されていたことは農専側史料(昭和 24 年 3 月 18 日「教官会議記録」)からも確認できる。
- 16) 新制国立大学がいざ発足してみると、15 名のうちの伊藤誠哉は北海道帝国大学総長から引き続き新制北海道大学の総長を務めることになっており、田所哲太郎は北海道学

芸大学初代学長に就任していた。また、安藤正次については三重大学の初代学長選考においても候補者としてその名があがっていた（『三重大学五十年史』（通史編・資料編）56-58頁、および羽田・金井前掲論文 161-162頁）。

- 17) プロフィールは、株式会社人事興信所刊『人事興信録』，帝国大学出身録編輯所刊『帝国大学出身録』，TBS ブリタニカ刊『ブリタニカ国際大百科事典』等を参考にまとめた。
- 18) 前身の札幌農学校および東北帝国大学農科大学を含む。
- 19) 其々の括弧内は、各人の出身地を含む現在の自治体名。
- 20) 農専側史料に綴じられている昭和 22 年 10 月 1 日時点の「職員名票」には、講師の欄に「可知」という文字がある。これが可知貫一を指すか否か不明であるが、岐阜大学の設置申請書類『岐阜大学第一冊（自昭 24 年 6 月至昭 28 年 5 月）』（国立公文書館所蔵）には教官予定者の表に可知貫一の名前を見つけることができる。可知の当時の年齢や出身地が岐阜県であることを考慮すれば、この時期に非常勤講師のような形で農専と繋がっていた可能性もあろう。そうであった場合、外部者ではなく内部者であるとも言える。なお『岐阜大学第一冊』には、同じく教官予定者として木方庸助の名前も確認できる。
- 21) この点については別の見方も存在する。国立国会図書館憲政資料室プランゲ文庫に保存されている『岐阜農専新聞』（昭和 24 年 5 月 15 日付）には、「青木学長推薦は三月二十日決定」と題した記事があり、それによれば 3 月 20 日に投票を行いその日の内に青木一人に決っていたという。加えて同記事は、青木が承諾したことが 29 日に公表され、3 校長が正式に訪問。そして文部省への申請がなされたとする。
- 22) 議事録では異体字を用いて「牧堅」となっているが、本稿では「牧野」とする。
- 23) □□は判読困難。「家庭」か。
- 24) 牧野英一が候補者の一人であったことは、『岐阜農専新聞』（昭和 24 年 5 月 15 日付）にも記されている。
- 25) 株式会社人事興信所刊『人事興信録』等を参考にした。
- 26) 福島が女子部長であったことは、国立公文書館所蔵『岐阜大学第一冊（自昭 24 年 6 月至昭 28 年 5 月）』に記載されている。
- 27) この日、奥田と福島がどこで青木に会ったかは定かでない。岐阜市日置江の青木邸であったか、それとも就任直前の住所として『岐阜大学芸新聞』（昭和 24 年 5 月 25 日付）に記載されている京都市上京区紫竹下本町（現在は同市北区）であったか、はたまた別の地か、今後の解明が期待される。
- 28) 『岐阜大学芸新聞』（昭和 24 年 6 月 10 日付）や『朝日新聞』（昭和 24 年 6 月 3 日付）には、6 月 2 日に発令されたとあるが、本稿では青木の履歴を記録した国立公文書館所蔵の史料「文部教官青木文一郎叙位の件」（『叙位・巻 5・7 月・昭和 29 年』所収）に基づき 5 月 31 日を真と判断した。

- 29) 現在の各務原市民公園（岐阜県各務原市那加門前町3丁目）。
- 30) 『岐阜大学新聞』（農学部版，昭和24年6月25日付）。

【主要参考文献】

- ・阿部万亀男（1967）「神戸外大時代の木方先生を偲ぶ」広島大学英文学会『英語英文學研究』第13巻第2号，156-158頁。
- ・大竹修（2015）「日本の近代獣医学史：人材育成の名人葛西勝弥」『動物臨床医学』第24巻第2号，92-95頁。
- ・岡山大学二十年史編さん委員会（1969）『岡山大学二十年史』，岡山大学。
- ・海後宗臣・寺崎昌男（1988）『大学教育』（戦後日本の教育改革9），東京大学出版会。
- ・川並秀賢（2006）「（一）ネズミの研究に生涯を捧げた初代岐阜大学長青木文一郎（一八八三～一九五四）」，日置江の歴史編集委員会編『日置江の歴史』，岐阜市日置江自治会連合会，844-849頁。
- ・記念誌編集委員会（2008）『創立85周年記念誌：岐阜高等農林学校から岐阜大学応用生物科学部に至る85年のあゆみ』，岐阜大学大学院応用生物科学研究科設置及び岐阜大学農学部創立85周年記念事業会。
- ・岐阜県教育委員会編（2004）『岐阜県教育史』（通史編現代一）。
- ・岐阜大学開学50周年記念誌発行等事業専門委員会（1999）『岐阜大学50年のあゆみ』。
- ・岐阜大学開学50周年記念誌発行等事業専門委員会（1999）『岐阜大学の五十年』。
- ・岐阜大学農学部十年の歩み委員会編集部（1960）『岐阜大学農学部十年の歩み』。
- ・岐阜大学農学部創立50周年記念事業実行委員会（1974）『創立50周年記念誌』。
- ・岐阜大学農学部創立70周年記念誌編集委員会（1994）『目でみる70年の歩み：岐阜大学農学部創立70周年記念誌』，岐阜大学農学部創立70周年記念事業会。
- ・作道好男・作道克彦編（1983）『岐阜大学農学部六十年史』，教育文化出版。
- ・作道好男・作道克彦編（1985）『岐阜県の師範学校：その歩みと岐阜大学教育学部』，教育文化出版。
- ・柴山芳隆（2003）「田所哲太郎：二つの博士号をもつ大学人」『先蹤録』刊行委員会編『先蹤録』，秋田県立秋田高等学校同窓会，171-177頁。
- ・日本近代教育史料研究会（1998）『教育刷新委員会教育刷新審議会会議録』，岩波書店。
- ・羽田貴史（1999）『戦後大学改革』，玉川大学出版部。
- ・羽田貴史・金井徹（2010）「国立大学長の選考制度に関する研究：選挙制度の定着と学長像」『日本教育行政学会年報』第36集，158-175頁。
- ・広島大学50年史編集委員会・広島大学文書館（2007）『広島大学五十年史』（通史編）。
- ・福島重一（1947）『社会と人格』，全国書房。
- ・奉天農業大学（1941）『興農：奉天農業大学研究資料』第19号。
- ・北海道大学大学文書館（2013）「大学文書館で澁谷紀三郎関係資料を受贈」北海道大学総

務企画部広報課編『北大時報』第709号, 55頁。

- ・三重大学開学50周年記念誌刊行専門委員会編(1999)『三重大学五十年史』(通史編・資料編), 三重大学開学50周年記念事業後援会。
- ・養老町(1978)『養老町史』(通史編下巻), 岐阜県養老郡養老町役場。
- ・「安城農林高等学校ウェブサイト」  
<http://www.anjonorin-h.aichi-c.ed.jp/honkounorekishih.html>  
(平成30年9月12日確認)。
- ・「官報」(昭和24年5月31日付)。
- ・「研究室のあゆみ」<http://lab.agr.hokudai.ac.jp/anim/breed/history.html>  
北海道大学大学院農学研究院生物資源科学専攻家畜生産生物学講座遺伝繁殖学研究室ウェブサイト(平成30年9月12日確認)。
- ・『岐大学芸新聞』, 『岐阜大学新聞(学芸学部版)』, 『岐阜大学新聞(農学部版)』, 『岐阜農専新聞』(国立国会図書館憲政資料室プランゲ文庫所蔵)。
- ・『岐阜大学第一冊(自昭24年6月至昭28年5月)』(国立公文書館所蔵)。
- ・『教官会議記録』(岐阜大学応用生物科学部所蔵)。
- ・『協議会議事録』(岐阜大学教育学部所蔵)。
- ・「第4章 可知貫一先生の功績」『夢よ咲け巨椋池』  
<http://www.maff.go.jp/kinki/seibi/oguraike/kachi/index.html>  
近畿農政局ウェブサイト(平成30年9月12日確認)。
- ・「台湾総督府農業試験所技師渋谷紀三郎」『公文雑纂・昭和十七年・第二十四巻・内閣・各庁高等官賞与八(鉄道省二～台湾総督府)』(国立公文書館所蔵)。
- ・「文部教官青木文一郎叙位の件」『叙位・巻5・7月・昭和29年』(国立公文書館所蔵)。

#### 【謝辞】

本研究を進めるうえでは数多くの方々にご協力を頂いた。心より御礼申し上げたい。とりわけ、岐阜大学応用生物科学部職員の神山千晴氏は、本研究で活用した岐阜大学創設当時の貴重な史料を発掘され、かつその解説にも協力して下さった。農専側および師範側双方のそれら史料の発見によって、創立前夜の岐阜大学の状況をより正確に理解することが可能となった。また、筆者の母校、高知工業高校の先輩である猪野千世夫氏は、異体字を含む古い文書の読み方について懇切丁寧に教授して下さった。本研究に対する両氏の貢献は甚だ大であり、ここに最大限の感謝を申し上げる。

**The First National University Presidential Selection under the New  
Japanese Higher Education System in 1949  
A Case Study of the Selection of the First President of Gifu University,  
Bunichiro Aoki**

Daisuke Hirouchi  
Organization for Promotion of Higher Education and Student Support,  
Gifu University  
Center for Collaborative Study with Community, Gifu University

**Abstract**

The purpose of this study is to clarify the selection process of the first president of Gifu University, Bunichiro Aoki. In the selection process, first, the establishment preparation committee, made up of 13 members from three predecessor schools, slated 45 persons on the longlist by taking into account not only their understanding of university education and administrative ability, but also whether they were related with the Gifu region. Next, three persons were shortlisted by the committee. Those were as follows in order of priority: Masatsugu Ando, born in Saitama, a former president of Taihoku Imperial University, Bunichiro Aoki, born in Gifu, a professor emeritus of Taihoku Imperial University, and Eiichi Makino, born in Gifu, a professor emeritus of Tokyo Imperial University. However, the prime candidate, Masatsugu Ando, declined the post. In the end, Bunichiro Aoki, the second candidate, was chosen to be the first president of Gifu University. The set of procedures had been done in a democratic manner and any intervention by the Ministry of Education was not observed. Thus, it was revealed that Gifu University had achieved autonomous control over presidential selection as long ago as 1949.

Key words: Bunichiro Aoki, Gifu University, Presidential Selection, National University, Taihoku Imperial University